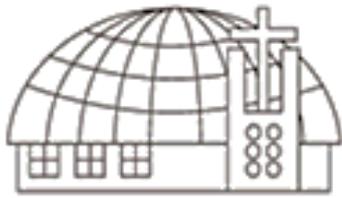


7月報(2021年) 萌 カトリック福山教会



福山教会活動テーマ：

「喜びをもっていのちをもたらす福音を社会に伝えよう」

〒720-0808 福山市昭和町7-26

☎【084】923-0614 FAX【084】923-0615

e-mail : fuku-ch@ktd.biglobe.ne.jp

【司祭叙階10周年に思う事】

ダン神父

「友の為に、自分の人生を捨てること。これ以上の愛はありません。」（ヨハネ15-13節）

10周年の叙階式の記念日のお祝いの時、私はいつも神から本当に祝福されてきたことを振り返ります。毎年が私の司祭の旅の物語です。各主日間に私が見た写真は全て、恵みの記憶として生き生きとしています。過去10年間私は皆さんに支えられ、強められ、そして信じられないほどの信仰に対して畏敬の念を抱いてきました。毎日私は、神の民によって、彼らが司祭に対して持つ愛を思い起します。

6月3日、私は10年前の私の叙階式のビデオを見ました。エルメル・イグナシオ神父が私の初ミサで説教した崇高な姿を見ました。二つのことが私の心に甦りました。一つ目は叙階の儀式的簡素さについての彼の説明です。私はマロロス司教ホセ・オリベルスの前にひざまずき、按手と聖霊によって司祭叙階されました。二つ目は、イグナシオ神父が、私が多くの人々の中から選ばれたことを説明した様子です。これはイエスが福音書の中で弟子たちに言われたことを反映しています。「あなたを選んだのは私である。」彼の喜びが完全になるために、彼の喜びの牧者になるために、イエスはこの不完全な道具を選びました。

ある時、私はイグナシオ神父に、私はあなたの協力司祭としてどうでしたかと尋ねるメールを送りました。すぐに短い返事が来ました。「ダン神父、あなたは最上ではなかったが、あなたは確かに最も愛されている。」私はそれをたいへん驚いて受け取りました。私は、学校で、神学校で、教区で「あなたは一番だ」とよく言われていましたが、最も愛されているとは思っていませんでした。ですからイグナシオ神父様の「一番ではなかった」の言葉にショックを受けました。私には最も愛されたという考えはなかったからです。そしてパプアニューギニアでの最初の宣教活動を振り返ると、確かに私は最も愛されているかもしれないと思うようになりました。それから私は自分自身、つまり愛される自分を再発見し始めました。

最高とみられることはよくやったことへの報酬かもしれませんが、ですが、最も愛されることは、それほどよくやれなかったことへの贈り物なのです。最終的に私を最上にするのは主の憐れみと皆さんの愛であり、私自身の努力ではありません。どうぞ私と全ての司祭のためにお祈りく

ださい。私たちがどれほど、神と自らの家族、友人、仲間、同僚に愛されているかを決して忘れないようにと。私たちは皆さんを愛することに飽くことなく、皆さんを愛することを決して諦めず歩んで来ました。神と皆さんに対する愛のために死ぬこともいといません。

私は喜びに満ちた司祭になる以外の道を知りません。イエスが福音の中で語られているこの喜びを感じたために、私は司祭になりました。この喜びは私たち司祭を励まし、また共有されなければなりません。毎日曜日、私はこの喜びを、神様の聖なる民に伝えようとして過ごしています。そして神様の喜びの牧者として私は気づくのは、私も奉仕するように呼ばれているということです。今でも私に思い浮かぶのは「友のために自分の命を捨てること、これ以上の愛はありません」という福音の箇所です。私は全ての人に仕えるように召されたので、友人、家族、信者、見知らぬ人を愛することを決して諦めません。私は、皆さんがイエスを知り、その喜び、愛そしてその存在を、全世界と共有できるように、私の人生をかけます。教会は新しい種類の司祭—喜びと勇氣にあふれた司祭を必要としています。世界を燃え立たせ、結果にかかわらずキリストの真理を大胆に宣言し、自分たちの言葉と行動を通して世界を聖別する、そのような司祭が必要とされています。

10年間の奉仕で、私はまだ歩み始めたばかりだと気づきました。神の恵みによって、この不完全な私に、思いがけない方法で10年の実りを受け取りました。それでもこの祭壇に近づいてパンを渡し、キリストという生きた存在を皆さんと分かち合うとき、私はまだ謙虚です。司祭職以上の冒険はありません。これ以上素晴らしい人生はありません。今日、私は神に仕え、皆さんに赦しを与え、パンを与え、説教をし、油を注ぎ、皆さんを愛して、司祭として生きることを許されていることを感謝します。

“No one has greater love than this, to lay down one’s life for one’s friends.” (John 15:13)

As I celebrated my 10 years sacerdotal anniversary, I always look back on how I was truly blessed by God through the years. Each year tells a story of my priestly journey. Every picture that I have seen over the last few days comes alive with a memory filled with grace. For the last 10 years, I have been inspired by you, loved by you, consoled by you, lifted up by you, and in awe of your incredible faith. Every day the people of God remind me of the love that they have for the priesthood.

I watched the homily that Father Elmer Ignacio preached at my first Mass. Two things jumped out at me at this point in my journey. The first was his explanation of the simplicity of the rite of ordination. I knelt down before Malolos Bishop, Jose Oliveros, and through the imposition of hands and the invocation of the Holy Spirit I became a priest. Through such a simple gesture something transformative took place. The second thing was how Father Ignacio explained how I was chosen from among men to sanctify men.

It was then that I texted a good friend, Fr. Ignacio, who was also my first parish priest after my ordination. I was his guest priest at the Mt. Carmel Parish, “Father,” I dared texted him, “how was I as your guest priest?” The reply, that came rather quick, was short, straightforward, and sincere: “Well, Dan, you were not the best, but you were certainly the most loved.”

I was shocked by the response I got. At first, I was looking blankly at the text on the screen of my mobile phone. I was used to being counted among the best, if not the very cream of the crop – in school, in the seminary, in the parish I grew up serving as an altar boy and a young lector. But in my first assignment after ordination, my best wasn’t good enough? I wasn’t even counted one among the many other best. I was really rather hurt by Fr. Ignacio's honest response. Why? Because, back then, I considered being the best was better than being the most loved. But it was truly on that same lonely evening that I found what I was missing: “Well, Dan,” Fr. Ignacio said, “you were not the best, but you were certainly the most loved.” And going through my memory of my first priestly assignment in Papua New Guinea, I saw that indeed I may not be the best but I was certainly the most loved. Without him knowing it, Fr. Ignacio, taught me the very important lesson that it is not the best that counts most but it is love that counts best. Then, I started to rediscover my self – my beloved self.

Being regarded as the best may be a reward for a work well done. But being the most loved is a gift for a work not so well done, even before a work is done at all. The best earns his title. The most loved is blest beyond his expectation, beyond what he deserves. And that is grace! Indeed, the best knows the psalm, but the most loved knows the Shepherd.

Thank you very much for loving me even when I am not at my best, even when I am not the best at all. It is God’s mercy and your love, not my own efforts – no matter how sincere they are – that ultimately make me the “best”.

Please pray for me and for all priests that we may never forget how much we are loved, first by God, then by you – our families, our friends, our flock, our co-workers in the Lord’s vineyard. Aware of how lavishly we are loved, may we never get tired loving you, never give up loving you, but even be ready to die for love of God and you.

I do not know how to be anything less than a joyful priest. Yes there are days that I may be in an unpleasant mood, but when I sanctify God’s people through the sacraments and especially in the celebration of the Eucharist, I must do it with joy. I do not know how to do it any other way. I became a priest because I felt this joy that Jesus speaks of in the Gospel. This joy that overwhelms our hearts and must be shared is a joy that I spend every Sunday trying to pass on to God’s holy people.

The Church needed a new kind of priest: priests who are joyful and courageous. We need priests who will set the world on fire, will boldly proclaim the truth of Christ no matter the consequences, and sanctify the world through their words and actions. But the Church needs committed laity as well who are joyful and courageous. These are difficult times that we are going through and we must have the courage to stand with our priests on the truths that Christ taught us and spread the joy of Christ to a broken world. As a priest, I am called to sanctify you so that you may in turn bring that joy and that holiness into the world.

Ten years of service and I realize that I am just getting started. Ten years of fruits that I see here before me and others who through God's grace received from this imperfect servant in an unexpected way. Even after all this time, I am still humbled when I approach this altar to break the bread and to share with all of you the living presence of Christ. There is no greater adventure than the priesthood. There is no greater life. And on this day, I thank you for allowing me to serve you, to absolve you, to feed you, to preach to you, to anoint you, to love you, and for simply allowing me to be your priest.

【シリーズ1：教区代表者会議】 教区代表者会議ってな～に？ 田中 靖

15年前に開催された第1回広島教区代表者会議のお手伝いをした経緯があって、この度第3回教区代表者会議の実行委員を務めることになりました。今日は皆さんの「教区代表者会議って何？」という素朴な疑問にお答えしていこうと思います。

質問1 教区代表者会議って何のためにやるの？

→ 今後の広島教区の歩むべき方向性を決めるため広く広島教区民の思いを聞きたいと、白浜司教様が招集されました。このような会議は「教区シノドス」とも呼ばれます。

質問2 いったい誰が参加するの？

→ 広島教区内にある全ての小教区やカトリック団体、カトリック学校、修道会、司祭など、ほぼ全ての組織の代表者が参加します。総勢で160名になる予定です。

質問3 いつ、どこでやるんですか？

→ 今年の11月23日（勤労感謝の日）に広島カテドラル（幟町）で行われます。

質問4 何が話し合われるの？

→ 私たちが直面している5つの課題が取り上げられます。「福音宣教」「平和」「多文化共生」「協働」「養成」の5つです。

質問5 福山教会からは誰が参加するの？

→ 参加する信徒は代議員と言いますが、福山教会から参加する代議員は、猪口神父様、ダン神父様、藤井幸恵さん、野田茂生さんの4人です。この他に援助マリア修道会からも1名の代議員が参加します。またカトリック校の福山暁の星学院からも1名出席します。

質問6 話し合ったり分かち合ったりしたことはどうなるの？

→ 2022年の復活節の際に、司教様は広島教区創立百周年に向けた司教宣言を出されますが、そ

の宣言は代表者会議で話し合われたことが基になります。

質問7 コロナがあってもやるんですか？

→ 現時点では開催するという計画ですが、コロナの状況を見て最終判断は10月ごろ司教様によって決められます。

質問8 福山教会では、これからどう準備するの？

→ 代議員は福山教会の代表ですから、福山教会の皆さんの思いを持って会議に臨みます。そのために今後代議員を中心として、福山教会内で課題に対する話し合いの会が企画されます。

質問9 私は何をすればいいの？

→ 教会に対してご意見があれば何なりと代議員にお伝えください。どんなことでも構いません。教区代表者会議に関する話し合いの会があった場合には、是非参加してください。

また「教区代表者会議のための祈り」がありますので、み旨に応えられるようにお祈りください。

以上、お分かりいただけましたか？

福山教会での準備もこれから少しずつ始まります。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

【信仰に生きる】

有好 秀子

私の信仰生活は導かれた日々の連続であった。

10代の終わりのころ、友人に誘われて教会に行き、生まれて初めてスペイン人の神父様にお会いした。たどたどしい日本語で話しかけられたのを今でもよく覚えている。程なくして今は亡きシスターから公共要理（カテキズム）をみっちり一年間学び受洗の恵みを頂いた。山口市の山口カトリック教会である。当時は聖母会に入ってお互いに信仰について学び合った。当時は守るべき主日、祝日は司祭の許可がなければ休むことは許されなかった。大齋、小齋も同じ。但し医療従事者と病人は別。現代でも基本は一緒です。

ミサに与り、パイプオルガンに合わせて神を賛美した喜び、また信者同士の交流も大切なひと時に内気な私は多くのことを学ぶことができた。子育てする中で親同士の交流があったり、園を通して親の知らなかった子ども達の側面を聞いたり、母親の私も成長させて頂いたように思います。

私が幼いころ、母が神、仏の前でよく祈っていたのを思い出します。幼い心に母の祈る姿が焼き付いていたようです。今思えば幼児期の敏感期の大切さが理解できます。

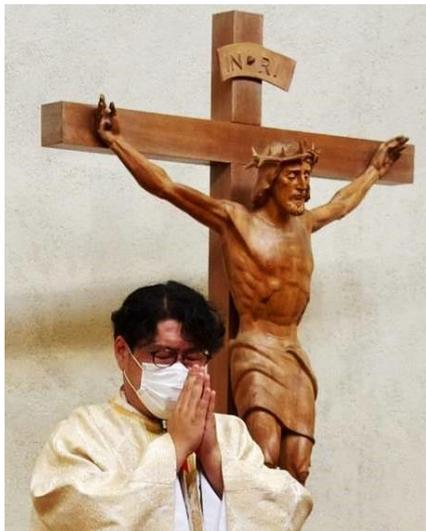
福山に転居して程なく教育現場で働くことになり、種々の問題に遭遇した時、解決の糸口は何時もみ言葉（聖書）が起点だった。愛の教えは何ものにも代えがたい。人々との交流によって私は育てられたと思います。また、私が些細な事に悩む時、友人の一言で気持ちがすーっと楽になったり、友人の笑顔に元気を貰ったり、数々の著書から学び乍ら気づかされたこともあります。神に祈り乍ら力を頂き、この様に私は信仰に導かれたのだと思っています。人々とのかかわりの

中で八十路にとつぷりと漬かっている今、神様って人を介して働かれるのがよくわかります。コロナ禍の中で大自然から力を頂くこともしばしばです。高齢期に達した今、人の痛みも少しは分かってきたように思います。少し遅すぎたでしょうか。

4年前に帰天した夫は家族のよき助言者であり、一緒に苦労した事は忘れません。きっと今も見守ってくれていると確信しています。

今はコロナ感染症にかからない様に気を付け乍ら皆で心を寄せ合って平和のために祈り、恵みの日々を心豊かに過ごせたら幸いだと思っています。

【葉書を送りました】



コロナ禍で病者訪問などができない日々が続いていますが、ミサは非公開で祝われています。6月は「イエスの聖心の月」です。本来であれば皆様と聖体賛美式等を執り行いたところですが、今年は6日が「キリストの聖体の祭日」にあたることから、せめて絵葉書で祈りを共にしたいと思います。

コロナ禍中、病人訪問に行けない状況が続いていますので、病人訪問先と長い間個人ファイルを見ておられない方々150名の皆様に神父様の写真付ハガキに神父様直々のご挨拶文を入れて送らせていただきました。その結果、教会からハガキが届いて嬉しかったというお声や、また数名の宛先不明者も分かりました。こうした教会との繋がりはとても大切だと感じ、これからも時折お便りをだしていこうと思っています。 事務

【改宗式がありました】 マルガリタ・マリア・アラコク仲谷沙弥香さんの紹介 野田茂生



仲谷沙弥香さんは、卓越した鍵盤楽器演奏者として、市内外で、わけてもカトリック教会で、たびたび演奏しているので、私たちの「旧知の友」と呼んでもいいような人です。この度の改宗式を経て、改めて私たちの共同体に迎えることが出来たことは、この上無い喜びに他なりません。私は、彼女とともに数多くの楽興の時間を積み重ねて来ましたが、彼女が自分自身のことを語るのをほとんど耳にした

ことがありません。それほどに普段はまったく控え目な人柄です。それでも、アメリカ留学時代の生活を尋ねたおりに、1日に10時間オルガンを弾き、残りの時間はひたすらドストエフスキーを読んだ、とぼそぼそと語ったのがとても印象に残っています。その演奏の特徴は、言葉の通りに神懸かったような集中力と閃きだと思います。彼女においては、演奏することと祈ることはまったく同義と言っていいでしょう。私たちの教会において、演奏のみならず、さまざまな場面で素晴らしい活躍の場があることを、期待してやみません。

猛暑から園児たちを守るために園庭に日除けネットがつけました！！

鬱陶しい感じはありますが、これも時代の要請。紫外線防止陽射し防護ネット。有難きかな！



【墓地使用規定の改定について】

墓地管理部 大塚睦雄

今まで、共同墓は生前予約できましたが、区画墓は亡くなってからでないと購入出来ないということになっていましたが、現在の状況を鑑み、今年度から共同墓・区画墓ともに生前予約出来るように規定を改定します。

区画墓が生前予約出来なかったのは、2013年墓地の大規模改修工事がなされ共同墓が設置された当時、区画墓が近々一杯になり足りなくなるだろうという予測があったからです。そのため共同墓もつくられ、新たに区画墓用の区画も増設されました。しかし、この間、葬儀や墓に関する世の中の意識が非常に変わってきており、また少子高齢化の中で墓の管理後継者が猛スピードで途絶えて行っている現状もあり、多くの墓が「墓仕舞い」されています。福山教会の墓地も例外ではなく、ここ数年は共同墓の購入は順調ですが、区画墓は、購入よりも「墓仕舞い」の件数のほうが多くなってきています。区画墓がぽつりぽつりとあいてきており、将来的に一杯に埋まるという状況は考えにくくなってきています。とは言え、区画墓をどんどん購入すればいいということではなく、区画墓はあくまで家族の墓であり、先祖代々の墓ということですから、管理後継者がいつまで続くのかということもよく考えて購入してほしいと思います。管理者が不明になった場合、教会が「墓仕舞い」するということになりますが、教会がする場合は、煩雑な手続きが必要になりますし、お金も教会の負担になります。

改定は次のようになります。

(改定前) 第9条「墓地使用予約制限」

区画墓使用に当たっては、生前中の予約はできない。信徒共同墓については、生前に予約可能であるが、その際には墓地管理部で協議し決定する。

第2条「墓の種類と埋葬可能な範囲」

墓地には3種類の「墓」を建立することができ、埋葬可能な対象範囲は次の通りとする。

- (1) 区画墓（永代使用・・・墓石・墓標は申請者負担）

（改定後） 第9条「墓地使用の予約について」

区画墓、信徒共同墓ともに生前に予約購入が可能である。ただし、区画墓については、購入後1年以内に墓石を設置すること。1年以内に設置されない場合は解約となる。また、墓石設置後30年経過以降に管理後継者と連絡が取れなくなった場合には墓地管理部で協議し、無縁墓として、墓石を撤去し、遺骨を塚墓に移す。（墓地は更地となり、他の人が購入可能になる。）共同墓については、購入後すみやかに表札に洗礼名・名前を刻銘すること。

第2条「墓の種類と埋葬可能な範囲」

墓地には3種類の「墓」を建立することができ、埋葬可能な対象範囲は次の通りとする。

- (1) 区画墓（管理後継者が続く限り、永代使用・・・墓石・墓標は本人負担）
- (2) 墓地に新しい祭壇ができました



【南相馬便り㊿2021年6月】 援助マリア修道会南相馬修道院 北村令子

新緑から深緑の季節になりました。

過ごしやすい季節になって、親しい人との親密さを深めていきたい時ですが、コロナの感染拡大が止まりません。人との距離を取らざるを得ない状況は、これからの社会の在り方、人生の生き方まで変えられるような感じがします。

これからコロナによって社会がどのようになっていくのか皆目わからないこのような状況の中で、4月13日どさくさに紛れてと言ってもいいような政府のやり方に、大きな疑問を投げかけたいと思います。原発の廃炉によって出る放射能トリチウム汚染水 — 最近処理水という言葉にすり替えられている — の海洋放出への決定です。漁業関係者との話し合いをした上で決定



したと報じられていますが、あれが話し合いというものなのでしょうか？海洋放出という結論が先にあって、形ばかりに漁業関係者と会談した事実を作り上げて、意見を聞いたことにしているにすぎないように思われます。南相馬市議会は海洋放出への抗議と撤回の意見書を政府に提出しました。素人の私にはよくわかりませんが、基準の40倍に希釈して流すと言っていますが、薄めても同じ量だけのトリチウムは海に流されるので海のトリチウム量は全く同じではないか？そして、今の科学で安全と言っても、何年後かには安全ではなかった、ということになるのではないか？原発は安全と言われて裏切られた者の気持ちです。たとえ安全なものだったとしても、今、復興の緒に就いたばかりの今、漁業は今まで試験操業で、この4月からやっと本格操業に入ったという今、逆なでするようなやり方に私は怒りを覚えます。

大阪の府知事は、無害で国が責任を持つなら、大阪湾に放出してもいいと言っておられます。東京湾はいかがでしょう？全国の工業地帯の港湾（漁港でなく）にタンカーで運んで放出という案は出されないのでしょうか？もっともっと国民的対話がなされるべきではないのでしょうか？福島県民だけのことでなく、日本全国民の問題としてとらえて、考えるべきことではないのでしょうか？なぜなら全国に原発があり、同じことが起こらない保証はないのですから。政府の机上の空論には、みんな嫌気がさしています。もっと地元の声、国民の声と知恵を求めるべきではないのでしょうか？

そして地元の方にはもっと複雑な心情があります。東電の原発によって生業を得ている人も多いからです。自身が被害者であり、同時に加害者の会社の仕事を請け負っているというやり場のない気持ちもあることを理解しなければなりません。片方の立場だけで、もの事を片付けることも、言うこともできないのです。ちょっと重い話題になってしまいました。話題を変えます。

この前、目の不自由なご婦人と霊園で一緒に祈って、安堵したという話の続きですが、ある土曜日の朝、その日、私は自分の書類の整理をするつもりで、訪問はちょっと控えようと思って電話で「げんき？」と声をかけてみました。「げんきだよ！大丈夫だから」と言われたので安心していました。ところが、昼食を済ませて、仕事にとりかかろうとした時、その方から電話がかかって、「洗濯機の排水がおかしくなって水漏れしているみたいだ！来て見てくんないか？」と。「うんすぐ行くよ、待ってて！」と（内心私で何とかなる問題でなかったらどうしようと心配しながら）行ってみると、何のことはない、洗濯物をぎゅうぎゅうに入れすぎただけのことでした。「朝、電話をくれていたから、頼んでみようと思った」と。大おしゃべりをして帰りました。ちょっとしたことが関わりを深めることになることを実感した出来事でした。



5月4日お天気が良くて、小高駅に行ってきました。お休みの日なので人がいなくて寂しかったのですが、憲法学者の鈴木安蔵についての掲示がありました。鈴木安蔵は今の憲法草案の起草者の一人です。憲法はアメリカに押し付けられたものとの見方が強いのですが、実際に草案の執筆者は鈴木安蔵をはじめとする日本人で、GHQ がそれを基にしたと言われています。鈴木安蔵の旧宅は、修道院から歩いて5分くらいの所にあります。近くにはプロテスタントの教会もあり、彼もキリスト教の影響を強く受けています。平和、平等、人権など。

小高駅は無人駅で、もと駅員がいた部屋をフリースペースとして、誰でも使えるようになっています。駅員の代わりに駅守という方がいて、コーディネートしておられるようです。WiFi が使えて、高校生がよく電車待ちに使ったり、サークル活動に使ったりしているようです。映画ファンが木曜日の夕方、映画鑑賞をしたり、会議に使われたりするようです。この駅守の方も県外からの移住者で、一般社団法人ネクストコモンズラボ（全国の地域おこし協力隊）のプロジェクトに参加しているメンバーです。若者が復興の力となっています。

7月・8月の行事予定

7 月		8 月	
3 (土)	聖園合宿	6(金)	主の変容 広島平和行事
4 (日)	平和の使徒推進本部会議	8(日)	福山空襲追悼
18 (日)	ダン神父様霊名のお祝い 街頭募金 日曜学校終業式	9(月)	長崎原爆の日
24 (土)	定例委員会	15(日)	聖母の被昇天 猪口神父様霊名のお祝い
25 (日)	墓地ミサ (教会 7:00 ミサなし 雨天 8/1)		

【個人ファイルの整理】 教会も建設から23年を迎えようとしており、あちこちで補修を行っているところ。個人ファイルコーナーも転出や帰天などで空白の所が出てきています。そこで転入者のためにも個人ファイルコーナーの整理を行っています。教会に来られている方なのか来られていない方なのか把握できないため、手始めにファイルの中に配布物がたまっていらっしゃる方のファイルは一旦抜かせていただき別の場所に保管させていただきます。事務に声をかけていただければ戻しますのでお声掛けください。宜しくお願いします。事務